

アメリカ文学研究の現状と課題 ——脱構築から惑星思考へ American Literary Studies: From Deconstruction to Planetary

巽孝之
TATSUMI Takayuki

0. はじめに——トマス・ピンチョンの半世紀

2009年8月、現代アメリカ文学を代表しノーベル文学賞常連候補として広く知られるトマス・ピンチョンが、その第七長編『インヒアラント・ヴァイス』(*Inherent Vice*)を発表した。初期の1960年代から70年代にかけては世紀転換期から二つの世界大戦前後の歴史をグローバルな視点から語った百科全書小説『V.』(*V.*, 1963)や『重力の虹』(*Gravity's Rainbow*, 1973)を、1990年代にはアメリカ独立革命前夜を舞台にした歴史改変小説『メイソン & ディクソン』(*Mason & Dixon*, 1997)を刊行し、21世紀に入るや再び初期の多角的視点に戻って世紀転換期から第一次世界大戦前後までを扱う『アゲインスト・ザ・デイ』(*Against the Day*, 2006)を発表し驚くべき射程の広さを誇る作家は、しかし一方、第二長編『競売ナンバー49の叫び』(*The Crying of Lot 49*, 1966)から1980年代感覚に満ちた『ヴァインランド』(*Vineland*, 1990)、そして今回の最新長編『インヒアラント・ヴァイス』へと連なり舞台も重なる西海岸カリフォルニア小説のサーガともいえる系譜を脈々と織り紡いでいる。たとえば『49』ヒロインの夫ムーチョが『ヴァインランド』でも再登場し、彼女に莫大な遺産を残す大富豪インヴェラリティの面影は『インヒアラント・ヴァイス』における主人公ラリー・ドク・スポーテロの元恋人シャスタ・フェイ・ヘブワースの愛人たる不動産王ミッキー・ウルフマンの性格造型にも継承されているのは、偶然ではない。かつて『49』では、エディバがインヴェラリティの秘密を探ろうとすればするほど、かえっ

て彼女自身が生前に彼の仕掛けた罠の深みへはまっていきかねない不思議が——何かを主体的に探し求めようとする者本人が、すでに他の誰かによって探し求められている、あるいは操られているという逆説的構図が——表現されていた。それが『ヴァインランド』になると 60 年代挫折派がいかにレーガン政権下の 80 年代を生き抜けるのか、あるいは仮死人となってしか存続しえないのかが物語られ、さらに再び舞台を 1960 年代に据えた疑似歴史小説『インヒアラント・ヴァイス』では、まさにそのタイトルに掲げられた保険用語「固有の瑕疵」を地でいくように、失踪した不動産王ウルフマンを追いかけていくと麻薬をめぐる巨大な陰謀とともに脱税目的の謎の組織が浮かび上がり、対抗文化の担い手といえども決して体制と無縁ではないことが判明する。

ピンチョンならではの地と柄、現実と反現実、国家権力と対抗勢力、テキストとコンテクストが識別しがたく絡み合う陰謀論的構図へのオブセッションは、半世紀近い歳月を経た西海岸サーガにおいてなおも健在であり、だからこそ 60 年代前半に歴史家リチャード・ホーフスタッターが刊行した『アメリカ政治におけるパラノイド・スタイル』(*The Paranoid Style in American Politics*, 1965) の意義も再評価されねばならない。1960 年代初頭、キューバ・ミサイル危機における全面核戦争の恐怖からケネディ大統領暗殺へと展開する過程で浮上した権謀術数渦巻く構図は、アメリカ内部に未曾有の国民的パラノイアの症状を引き起こしたが、とはいえ当時の時代精神は、今日でも決して雲散霧消したわけではないからだ。1980 年代におけるロナルド・レーガン大統領が構想したスターウォーズ計画や、21 世紀を迎えたイラク戦争下でジョージ・W・ブッシュ大統領が血道を上げたイラク大量破壊兵器捜索などは、パラノイア健在を示す証拠の一端にすぎない。そもそも 9.11 同時多発テロの現場を「グラウンド・ゼロ」なる濫喩、すなわち比喩の濫用によって広く全世界に知らしめたことは、その根本にあるヒロシマ・ナガサキの記憶を隠蔽するとともに、新世紀アメリカが劣化ウラン弾を使用した小規模核戦争の口実を確保する絶好のきっかけになったであろう。トマス・ピンチョンが生き抜いた 1960 年代から今日へ至る半世紀は、そっくりそのまま、新批評から構造主義へ、脱構築から新歴史主義批評さらにはポストコロニアリ

ズムを経て文化研究全般へ、ひいては惑星思考の比較文学研究へと連動せざるをえなかったアメリカ文学研究そのものの半世紀についても、有意義な洞察を与えてくれる。

1. 1980年代以降のアメリカ文学研究 ——エリオット、バーコヴィッチ、ソラーズ

アメリカ文学研究が1920年代におけるメルヴィル再評価をきっかけに形成されたことは、すでに広く知られている。そしてこの分野は、大方の文学研究の御多分に漏れず、とりわけ1980年代から2000年代までのあいだに激動の時代をくり抜けてきた。それはポスト構造主義理論の影響により正統的英文学のテキスト再読を重視するポスト新批評ともいえる傾向が、米ソ冷戦解消前後より、歴史をもテクスチュアルなもの、テキストも歴史的なるものという二重のヴィジョンを追究する新歴史主義に発展解消し、その過程において少数派の文学テキストにおける歴史的コンテクストとの相互交渉が重視され、学際的方法論が強化されていく流れであった。

そうした変容のプロセスを身を以てくり抜け、確実に理論革命を体現してきた学者批評家には、ヘンリー・ジェイムズ研究からスタートしたカリフォルニア大学アーヴァイン校教授ジョン・カーロス・ロウがいる。彼は1980年代にジャック・デリダやポール・ド・マンの影響の濃い脱構築批評を積極的に取り込んだアメリカン・ルネッサンス研究の名著『税関を通して』(*Through the Custom-House*, 1982)で話題を呼んだのち、1990年代以後はドナルド・ピーズらの提唱するニュー・アメリカニズムとも連動しながら21世紀には国家的境界を越えた比較方法論を求め、合衆国とアメリカないし南北アメリカ大陸を同義語とみなさない「新しいアメリカ研究」を模索し始めた。その背後には、9.11同時多発テロ以降、文学と歴史学、政治学の連動をこれまで以上に密接なものとし、アメリカ国内ではアメリカ批判が困難になった緊急事態、いわゆる例外事態を承けて、たんに国際的というにとどまらず、伝統的なアメリカニズムを根本的に問い直すアメリカ国外におけるアメリカ研究の動きをも加速させることになったいきさつがある。オックスフォー

ド大学教授ポール・ジャイルズらの率いる国際アメリカ学会 “International American Studies Association”¹、そうした流れを電子学術誌のうえでも反映させようとスタンフォード大学教授シェリー・フィッシャー・フィッシュキンらの率いる *Journal of Transnational American Studies*² などが実例である。そうした新世紀のアメリカ研究の精華を一挙にまとめた最先端の野心的なアンソロジーとしては、2009年にノースウェスタン大学教授ジャニス・ラドウェイが筆頭編者となりウィリー＝ブラックウェル社から刊行した、それ自体ヒップホップ的カットアップ & サンプリング & リミックス技法の産物とも呼ぶべき『アメリカン・スタディーズ』を挙げることができる [Radway, et al. 2009]。

方法論的な革命は必然的にアメリカ文学史の再検討を促した。ポスト構造主義理論が勃興し隆盛をきわめていた1980年代後半、ピューリタン文学の専門家であったエモリー・エリオットは『コロンビア大学版アメリカ合衆国文学史』一卷本を編纂刊行し、新歴史主義理論が勃興した1990年代から21世紀初頭にかけては同じ専門のサクヴァン・バーコヴィッチが『ケンブリッジ大学版アメリカ文学史』全8巻を編纂したが、21世紀に入り、黒人文学を中心に非白人系民族文学を専門とするワナー・ソラズがグレイル・マーカスとともに『ハーヴァード大学版新アメリカ文学史』一卷本を編纂し、16世紀に「アメリカ」なる地名が初登場した時点から21世紀のオバマ大統領誕生までを画期的な編年体方式で一貫させたことは、アメリカ文学研究上でも新しい方向を示唆してやまない [Elliott 1988; Bercovitch 1994-2005; Marcus and Sollors 2009]。

2. 惑星思考、半球思考、間大陸思考 ——スピヴァク、デイモク、ホアン

その関連で、ポストコロニアリズム理論の旗手であるインド系アメリカ人批評家のコロンビア大学教授ガヤトリ・スピヴァクの提唱になる21世紀ならではの比較文学理論が「惑星思考」「Planetary」の名で精密化し、環境批評の文脈で比較アメリカ研究の新方向を触発していることは偶然ではない。

比較文学の死を再生に変容させるべく人文科学の復興に賭けた『ある学問の死』の最終章最終段落において、彼女はこう説く [Spivak 2003]。

この勝ち誇ったグローバル資本の時代にあって、テキスト的なものの読解と教授のうちに責任=応答可能性 (responsibility) を活性化させつけておくということは、一見したところでは、およそ非実的なことである。しかしながら、そのように応答可能なものであるということこそは、テキスト的なものの権利なのだ。そして、「惑星」というのは、ここでは、おそらくいつの場合もつねにそうであるように、集合的責任=応答可能性を権利として記銘するための濫^{カク}喩^{クレーシス}なのである。その他者性、決定的な経験は、神秘的で不連続なものである。一言でいえば、それは不可能なものの経験なのだ (上村忠男訳に準ずる)。

ふりかえってみれば、惑星思考は独立革命当時からアメリカの政治学と不即不離のかたちで潜在していたと言ってよい。かつてトマス・ジェファソンは1776年に執筆した「独立宣言」草稿のうちに黒人奴隷制廃止案を盛り込み、時のイギリス国王ジョージ3世が人間性を侵害した悪行のひとつとして、アフリカ原住民を捕囚し「異なる半球での奴隷生活を強いたこと」(carrying them into slavery in another hemisphere) を数えあげた。大陸会議はこの提案を時期尚早と判断し「独立宣言」決定版からは削除したが、にもかかわらずここで表明された「半球思考」は、いまでも啓発的である。というのも、それから半世紀ほどを経た1823年には、アメリカ大陸を中心とする西半球が大西洋をはさんだヨーロッパなど東半球の干渉を受けないこと、保護の必要がある以外は他国の植民地化を促進しないことを前提とする孤立主義政策「モンロー・ドクトリン」の雛型が誕生したからだ。この政策は一見ポストコロニアリズムの祖型のようにも見えるが、皮肉にも新時代における帝国主義の原型をも兼ねる。こうした発想で、グレッチェン・マーフィの『半球的想像力』がリディア・マリア・チャイルドやジェイムズ・フェニモア・クーパーらの深層にモンロー・ドクトリンと共振する政治的無意識を暴き出した考察は鋭い [Murphy 2005]。

このように半球思考を正当化しつつ錯綜させるアメリカ独自の空間戦略を批判するところに、惑星思考の素地がひそむ。かくしてガヤトリ・スピヴァ

クを批判的に継承する中国系アメリカ人批評家のイエール大学教授ワイ・チー・ディモクの『間大陸の時層』は、13世紀のモンゴル人によるバグダッドの古文書破壊とまったく同じことが、21世紀のアメリカ軍によるイラク国立図書館の破壊というかたちで起こっていることに注目し、8世紀もの時の隔たりにもかかわらず一定の因果律を結ぶ「深い時間」“Deep Time”を示してみせた[Dimock 2006]。またゲイリー・オキヒロは最近の研究『群島世界』において、プレートテクトニクス理論の発想から、大陸ならぬ島々から成り立つ海中心の考え方を立ち上げている[Okhiro 2008]。これらはいずれも「近代的人間」の時空間意識を根底から疑い、「惑星思考」を深めつつ「文学とは何か」を探り直す試みであった。

とはいえ、上に引用したスピヴァクの謎めいた定義、とりわけ「『惑星』というのは、ここでは、おそらくいつの場合もつねにそうであるように、集合的責任＝応答可能性を権利として記録するための濫^{カタクレース}喩なのである」という呪文めいた言説は、具体的にはいかに咀嚼されるだろうか。げんにこの難解な結論部には多くの解釈が出されており、惑星思考を地でいくアジア系アメリカ人魔術的リアリズム作家カレン・テイ・ヤマシタ自身も面くらい、カリフォルニア大学サンタクルース校の同僚に尋ね回ったという逸話が残っているほどだ。にもかかわらず、昨今わたしにとってはいちばん説得力に満ちた再解釈が、2008年に中国系アメリカ人学者批評家のひとりでカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授ユンテ・ホアンが刊行した『環太平洋的想像力——歴史・文学・対抗詩学』のうちに見出されたのもまた、事実なのである[Huang 2008]。

ここでホアンが取り上げるのは、広島原爆投下の生き残りというふれこみで、1990年代半ばに、『グランド・ストリート』や『コンジャンクションズ』、それに『アメリカン・ポエトリー・レビュー』などにぞくぞくと作品を発表した日系詩人アラキ・ヤサダにまつわる20世紀アメリカ文学史上でも稀有なスキャンダルだ。じっさいのところ、アラキ・ヤサダなどという人物は実在せず、「トサ・モトキユ」の作品だと暴露されてしまうばかりか、当のトサ・モトキユすら、ケント・ジョンソンらアメリカ人2名のペンネームである可能性が強くなったのだから、非難轟々の大論争が巻き起こった。核

投下した国家に属するアメリカ人が被爆者に偽装して多くの涙を搾り取ったのだから、これは文学ならぬれっきとした犯罪行為だと見る激越な批判が相次いだのである。そこには、国家的トラウマを弄ばれ国民的主体が脅かされたことへの、本質的な怒りがひそむだろう。

しかし、やがてポストモダニズム文学研究の権威ブライアン・マクヘイルが介入し、そこにベンジャミン・フランクリンゆかりの法螺話 (hoax) からポストモダンなメタフィクションに至るブラックユーモア豊かなアメリカ文学的伝統を喝破する [McHale 2003]。彼の分類によれば、たんに他人に一杯食わせたいという純然たる法螺話が genuine hoax だとしたら、読者を試したり裁いたりするためのトンデモ本を trap hoax、真偽の問題を美学的な水準へ高め芸術的効果を狙ったメタ文学的作品を mock hoax と呼ぶ。そして前記のアラキ・ヤサダ作品はこの最後のカテゴリーに属し、北米文学史におけるジャポニズムの伝統をふまえつつ、日本文化を歪曲して表象するどころか、むしろ日本文化を映し出すアメリカ人のレンズそのものを問い直す詩として、再定位される。もちろん、19世紀から今日まで、人種や性差を偽る文学作品は、決して少なくない。にもかかわらず、核兵器以後の時代に日米の国民的主体のありかを問う文学的戦略として、アラキ作品は独自の効果を発揮したというのが、マクヘイルの洞察なのである。

こうしたアラキ・ヤサダ論争をめぐって、ユンテ・ホアンはスピヴァクの惑星思考を批判的に発展させた視点から介入を試みる。彼は、デリダの『友愛のポリティクス』における「テレオポイエーシス」概念を再解釈して役立つようとするスピヴァク本人のレトリックのうちに、「確たる保証もないままに (without guarantees) ポイエーシス——想像力による制作——によって遠く隔たったものに影響を及ぼし、かくてはそれに明確な述語規定を与えることによってその価値を逆転させるというのは、たしかに、帰属という観念に衝撃を与える発想のひとつと言えらるだろう」 [Huang 2008: 31] といった見解、および「これは、あなたが自身を想像することなのだ。確たる保証もないままに (without guarantees)、他の文化によって、他の文化のなかで、真にあなたが想像されるがままにしておくこと (その不可能性を経験すること) なのだ」 [Huang 2008: 52] といった見解が胚胎しており、そ

こに知識 (knowledge) の限界をふまえ容認 (acknowledgment) を至上命令とする姿勢を見出す。つまり、他者の存在論的地位を容認し、われわれ自身の知識の認識論的落差をわきまえることによってしか、搾取と拒絶を矯正すべき集合体および惑星思考の境地に達することはできないことを、ホアンは強調する。かくして彼はこんな結論を導き出す。「アメリカ文学はアラキ・ヤスサダが素知らぬ顔をしながらもじっさいには帰属している分野であり、日本史というのはヒロシマ & ナガサキの恐怖と同義であるが、まさにその両者のはざまにこそ、集合的責任 = 応答可能性と惑星的想像力が横たわっているのである」 [Huang 2008: 152]。

3. 読むことの精神分析——フロイト、デリダ、ド・マン

惑星思考の根本にまったく異なる文化同士の対話と責任 = 応答可能性が前提されているのは、偶然ではない。この理論の提唱者たる女性学者ガヤトリ・スピヴァクは、かつてコーネル大学在学中に精神分析批評とも縁の深い脱構築批評家ポール・ド・マンの薫陶を受け、さらには精神分析学者ジャック・ラカンとの論争でも知られる脱構築哲学者ジャック・デリダの名著『グラマトロジーについて』を英訳しているからだ。

とはいえ、対話といい責任 = 応答可能性といっても、そこから豊かな実りをもぎとるのは生半可な努力では実現しない。それは、これまでまったく未知であった他者の内部に広がる漆黒の深淵へ跳躍する営為に等しい。このことを考えるとき、わたしの脳裏には決まってこんな台詞が響く。

「先生がそうおっしゃるのはわかってましたわ」

これは、世紀転換期に臨床医フロイトの診療していたヒステリー患者ドラが、治療の過程において、医師本人へ投げかけた寸鉄の一撃である。患者ドラはフロイト理論を完全に見透かしたうえで、医師フロイトならば言いそうなことをあらかじめ推測し、予想が的中したとなると、彼の診断を真っ向から否定しきった。かくしてフロイトの精神分析理論そのものが根幹を脅かされることになり、ドラは治療から撤退していく。そう、別名『ドラの症例』として『あるヒステリー分析の断片』 (*Bruchstück einer Hysterie-Analyse*

1905. 邦訳：金関猛訳、筑摩書房、2006年。同書では「ドーラ」表記だが、本稿では比較的通りのいい「ドラ」で統一する）が名高いのは、皮肉なことに、フロイト理論の成功ではなく失敗をまざまざと描き出しているからである。それによって、精神分析のみならずすべての「理論」がその内部において「抵抗」を受けざるを得ず、そのあげく挫折せざるをえないことが、誰にも実感されるからである。

もちろん、この挫折があったからこそ、以後のフェミニズム批評やジェンダー戦略、クイア理論が成立したのだと、楽観的に捉えることもできる。しかし、かれこれ20年以上前の1980年代なかば、ニューヨーク州イサカにあるコーネル大学大学院留学中に、わたしが初めて課題図書だった『ドラの症例』を一読したときのショックは、まさに冒頭の一行に尽きた。

「先生がそうおっしゃるのはわかってましたわ」

わたしの専門はアメリカ文学研究だが、留学中に師事していたのは、アメリカにおけるフランス系構造主義以後の理論の大御所ジョナサン・カラーと、イエール脱構築派に連なるロマン主義文学研究者シンシア・チェイス、それにフェミニズム系アメリカ詩研究者デブラ・フリードであった。当時は、まだ脱構築批評が猛威をふるっていたから、文字どおり文学と文学以外の境界線を脱構築するのが最先端流行のカリキュラム編成であり、げんにわたしたちはワーズワスとフロイト、コールリッジとカント、ポーとデリダを分け隔てなく読まされたものだった。そしてその折、参考文献として挙げられていたのがフロイトの『ドラの症例』と、それをめぐる最新の精神分析批評書であり、通読してのち20年経ってもまだはっきりと覚えているのが、一介の女性患者にすぎぬドラが精神分析理論の大家フロイトを見限ると言ってもいいこの一言なのである。

じっさい、ドラの両親とその友人であるK夫妻とのあいだに複雑な人間関係が構築されていたのは、たしかなことだ。病弱だったドラの父親はK夫人に手厚い看護を受けていたが、それは明らかに看護関係を越えた恋愛関係であり、いっぽうK氏のほうは、K夫人を奪われた代償か、まだ14歳でしかないドラにキスしたり愛を告白したりしたという。父親の不品行の代償として自分が差し出されていることに気づいたドラが精神的パニックをき

たすのは当然だが、さらに重大なのは、彼女を待ち受けていた精神分析の権威フロイトが、ドラとK氏とのあいだにセクハラならぬ純粋な恋愛関係が、それに根ざす愛憎のアンビヴァレンスがあったのではないかと想定したことだ。ドラはくりかえし火事の夢を見て、そこでは母親が宝石箱を持ち出そうとするのを父親がさえぎり「私も、子どもたちもおまえの宝石箱のせいで灰になるのはごめんだ」と言ったという。その夢を解釈するフロイトは、現実にはK氏からドラが高価な宝石箱を贈られたと知るやいなや「宝石箱は、あなたがあのときポシットによってほめかしていたのと同じものを表すのに好んで用いられる徴です。つまり女性器です」と断定する。その瞬間、ドラはフロイトに対して、こう言い放つ――

「先生がそうおっしゃるのはわかってましたわ」

この一言を何度でも読み返すのは、皮肉なことに、まさしく「読む」という行為そのものの運命を、根本から考え直すことに等しいためである。このころ、わたしが傾倒していたもうひとりの精神分析批評家にはジャック・ラカン系の理論家であるイエール大学教授ショシヤナ・フェルマンがおり、彼女の卓越したヘンリー・ジェイムズ『ねじの回転』は、わたしたちが「テキストを読むこと」が「転移を体験すること」に等しい構図を実感させてくれた。そして、この水準においてこそ、フロイトの精神分析理論はジャック・デリダ、ポール・ド・マン以後の文学批評理論とスリリングな交錯を見せる。

転移とは、患者が医師のうちに過去の心的体験を、とうに終わったものとしてではなくたったいまそこにあるものとして、再生してしまうことである。たとえばドラの場合には父親との心的体験やK氏との心的体験を医師フロイト自身に見出すようになるという構造移動のメカニズムである。したがって、K氏とのあいだに愛憎関係を結んでいたのではないかと想定されていたドラは、治療の最中にフロイト本人の理論的強引さを察知し、そのあげく見限るかのように「先生がそうおっしゃるのはわかってましたわ」と対応したのだ。もちろんこれに対して逆転移の場合もあり、そこでは医師本人が患者と恋愛関係に陥り、極端なケースでは患者と結婚することも少なくない。ところがじっさいのところ、患者は自身の精神的来歴を他者内部に対して強引に読み取らざるをえないことが往々にしてあるし、医師も自身の精神分析理

論を他者内部にあるていど強引に当てはめざるをえない。仮に転移が思った以上に複雑で、医師の理論的な強引さが顕在化し耐え難いものとなった場合、患者は相手を見透かし三行半を突きつける。ドラがほんの14歳であったことを考えると、これはさらに幼女愛好症の実例でもあり、のちのウラジミール・ナボコフの『ロリータ』(Lolita, 1955)の先取りでもあると考えるのは、決して不可能ではあるまい。そして、われわれが対話といい責任=応答可能性というときには、まさしくこうした精神分析的転移を前提にした理論が不可欠なのである。その意味において、フロイトからヒントを得ながら「読むこと」の理論を洗練させた脱構築批評の本質は、1990年代以降の新歴史主義批評やポストコロニアリズム、ひいては惑星思考の学際的文化研究全般の内部に、いまでも脈々と受け継がれている。

4. おわりに——バーバラ・ジョンソンの墓碑銘

昨年2009年の初夏、『文藝』2009年冬号のために「自分の小説観を変えた小説・評論三冊」を列挙し理由を書け、というアンケートが来たので、即座にハーマン・メルヴィル『白鯨』(Moby-Dick, 1851. 邦訳：八木敏雄訳、岩波書店、2004年)、沼正三『家畜人ヤプー』(角川書店、1956-70年)、バーバラ・ジョンソン『批評的差異』(The Critical Difference, 1980. 未訳)の3冊を選んだ。この号はもう店頭から消えているから、以下に回答文の全文を掲げておかまうまい。

小説がわかるかどうか——これは文学青年的問いかけの紋切型である。それは、とある英米文学者が「ジョイスの『ダブリナーズ』を読むと、自分は北陸出身だからじつによくわかる」と語った評言に尽きている。

しかしいっぽう、小説のうちには「何が何だかよくわからないけれども面白い」怪物が出現することがあり、そのタイプにこそ、わたしは長く惹かれてやまない。アメリカ文学ではメルヴィルの『白鯨』が、日本文学では沼正三の『家畜人ヤプー』が、それぞれ極北だろう。加えて、そうした倒錯的評価基準自体を理論化しつつ、批評そのものが小説のように面白く読めることを証明したのが、ジョンソンの手になる脱構築批評の聖典『批評的差異』であった。

小説のほうは解説不要だろう。だが批評のほうで挙げた著者バーバラ・ジョンソンは、脱構築華やかなりしころ一世を風靡したとはいえ、必ずしも邦訳が多くはないから、ひょっとしたらいまではすっかり忘却されているだろうか。しかし、かれこれ30年前、ジョナサン・カラーとも比肩する彼女の本に出会わなかったら、わたしは構造主義や記号論に親しむこともアメリカ留学を考えることも、そして何より英語でしか表現しえない批評的フロンティアへ自ら踏み込むことも、決してなかったはずだ。脱構築理論に親しむ以前に、ジョンソンのシンプルにしてスリリングな論理展開による批評芸術こそが「自分の小説観を変えた」のは間違いない。

げんに、その第一著書『批評的差異』に収録されたさまざまな論考のうちでも「メルヴィルの拳」や「参照の枠組——ポー、ラカン、デリダ」は、メルヴィルの謎めいた中編小説『ビリー・バッド』やポー最高の探偵小説「盗まれた手紙」を中心に、あくまでテキストの細部を精読しつつ旧来の定説を心地よくも転覆し、さらには誰もが見過ごしていた文学的本質を明るみに出した点で、時に「書くことのレトリック」ならぬ「読むことのレトリック」がいかに強烈な破壊的創造力を発揮するものであるかを、思い知らせてくれたのだった。

1960年代に起源をもつ脱構築からジョンソンが取り出したのは「はざまの差異」から「内なる差異」へのパラダイム・シフトであったが、一見テキスト中心に映るその批評的態度には必然的に米ソ冷戦なる巨大な二項対立すなわち「はざまの差異」への批判が、ひいては冷戦時代そのものの掘って立つコンテクストへの批判が思い込められていただろう。

バーバラ・ジョンソンは1947年ボストン生まれ。バリバリの団塊の世代として激動の1960年代に青春を過ごし、1979年にはイエール大学にてド・マンの指導のもと博士号請求論文『詩的言語の脱構築』(*Défigurations du langage poétique*. 邦訳:土田知則訳、水声社、1997年)を書き上げ、80年に『批評的差異』を、81年にはデリダの『散種』英訳を、87年に『差異の世界』(*A World of Difference*. 邦訳:大橋洋一(他)訳、紀伊國屋書店、1990年)を矢継ぎ早に刊行してイエール学派の一翼を担った、まぎれもない時代の寵児であり、ここ四半世紀ほどはハーヴァード大学教授を務めていた(詳細は拙著

『メタファーはなぜ殺される——現在批評講義』松柏社、2000年、第二部参照)。

こう再確認すると、ヨーロッパ系の難解をさわめる現代思想を英語圏でわかりやすく普及した啓蒙家のように響くかもしれないが、しかしその仕事は一枚岩ではない。それは英語による批評文体の革命であった。ヨーロッパ思想を何よりも深遠と見る向きは、それがアメリカ的土壌に移植された帰結を往々にして軽んじる。独創的な思想的実質が誰にでも使える民主主義的文体に転換されてしまうことに対する、それは精神的自己防衛であろう。だが、文体という形式そのものに思想が宿っていることを、人は時として見過ごす。かの北米啓蒙主義者ベンジャミン・フランクリンを賛美したのはほかならぬ同時代ドイツの哲学者イマヌエル・カントであり、かの北米超越主義者ラルフ・ウォルドー・エマソンを賞賛したのはほかならぬ19世紀ドイツの思想家フリードリヒ・ニーチェであったが、フランクリンにせよエマソンにせよ最大の魅力はアメリカの文体の水準で発揮されていた。その意味で、ジョンソンは脱構築を实践するさいにも、彼女独自にしてアメリカ的な、あまりにアメリカ的な、ありとあらゆる「形式美」に対する偏愛を貫いたといえる。人間が動物と袂を分かつのはナルシス的な「かたちへの偏愛」に尽きる、と見るのが彼女の一贯した批評的前提なのである。わたしが一時、そんな彼女自身の英語のかたちそのものの美しさを徹底的に研究し調べ上げ、そこから多くを学び取ったゆえんも、「かたちへの偏愛」が転移した結果であろう。

だからこそ、去る2009年4月、サバティカルのためのボストン滞在中に出たばかりのジョンソンの新刊『人間と物』を手に取り、その批評的スタンスがいつになくはっきり表現されているばかりか、かつてなら欧米文学史上の正典を主たる分析対象に据えてきたこの批評家が、今回は決して少なくない現代小説や映画、ひいては大衆文化全般をめぐる議論に集中していることに、わたしは軽い眩暈を覚えたものだ [Johnson 2008]。

なにしろ、これまでメルヴィルやボードレー、バルザックなどを中心に人種や性差や階級をめくりシャープな分析を行ってきた知性が、本書ではマルクスやベンヤミン、ド・マンの理論を再援用しつつ、何とE・T・A・ホフマンの『砂男』やヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』、フィリップ・K・ディック原作の映画『ブレードランナー』、ブライアン・オールディス原作

の映画『A.I.』からバービー人形、ディズニー・アニメ、マイケル・ジャクソン、それに我が国のたまごっちまで、現代文化における「かたち」に飽くことなき好奇心を示し、旧来の「かたちへの偏愛」においても新境地を切り開いたのだから、これは画期的な批評的転回と呼ぶほかはない。

むろん、彼女の出世作のひとつがメアリ・シェリーの古典SF『フランケンシュタイン』におけるマッドサイエンティストと人造人間の関係に母と娘の関係性を読み込むフェミニスト的解読「わたしの怪物／わたし自身」（初出1982年、『差異の世界』所収）だったことを知る者には、こうした転回は何の不思議もないだろう。だが、にもかかわらず、ひとりの模範的な脱構築批評家が、ここまで一挙に電腦的想像力を噴出させ、最先端の人造美女論にも大きく寄与する思索を織り紡いでみせた「晩年のスタイル」は特筆に値する。1980年代初頭に彼女の仕事によって脱構築批評の洗礼を受け、文化研究の立場から責任＝応答可能性を実感し続けてきた筆者としては、ほんの数年前に自身が共編した『人造美女は可能か?』（慶應義塾大学出版会、2006年）とほぼ同じ方向を晩年の巨匠が歩んでいたことは、とうてい偶然と思われえない。前掲『文藝』アンケート回答でわたしが『批評的差異』を挙げたのも、長らくご無沙汰しながら再びバーバラ・ジョンソンの仕事そのものが気になり始めた——というかサバティカルという時間を得て自らの初心に立ち返ろうとしていた——ことに起因する。

したがって、彼女が去る2009年8月27日に小脳不調のため急逝したという知らせに接したときのショックは、筆舌に尽くしがたい。9月に西海岸はベイエリアに滞在していたころ、かつてイエール大学でジョンソンの薫陶を受け、いまはカリフォルニア大学バークレー校で教鞭を執るミリアム・サスとダン・オニールが教えてくれたのだった。わたしはたちまち、かつて1986年の秋、アラバマで行われた会議の席上、たまたま歓談する機会を得てサインをもらった『批評的差異』に、著者がこんなメッセージを記してくれたことを思い出した——「もっと（じっくり）話し合いたいものですね」（with the desire for more [unrushed] conversation）。どの講演でも、多少鼻にかかった声色で、にもかかわらずたえず澁刺として、誰よりも複雑な理論を誰よりも簡潔明快に語った彼女はしかし、今世紀に入ってから10年近く

ものあいだ車椅子生活となり、発話もままならなくなっていたのである。³

そのことを知るならば、遺著『人間と物』における「かたちへの偏愛」が、いつもどおり脱構築好みの「頓呼法」「活喩法」「比喩乱用」といった修辞装置を駆使しつつ、それまでかたちでしかなかったものがいつしか声を得て語り始める瞬間を強調し、人工生命理論にまで思いを馳せるという発展を見せたことは、着目しなくてはならない。かつての彼女は1980年代半ばの名論文「頓呼法、生命化、墮胎」（初出1986年、『差異の世界』所収）で、詩的言語の修辞的効果（スピーチアクト）によって非生命ないし死者がいきなり生命を帯びてしまうこと、それまで非在だったものがいきなり存在してしまうことの不思議を語っていた。その関心が四半世紀を経て生まれ、最晩年には本格的な墓碑銘論に結実している。古く18世紀初頭、ベンジャミン・フランクリンは若干22歳で自らの人生そのものを一冊の修正可能な書物とみなした短詩「墓碑銘」を執筆したが、21世紀初頭、バーバラ・ジョンソンは還暦を過ぎた最晩年の著作で、墓碑銘の機能を「生という虚構」を利用しつつ「死者に生命を付与し語らせる」ものと再定義した。そしてその直後、いかにも彼女らしく、この特殊なジャンルの特徴から普遍的な文学的本質へと、一気に跳躍してみせる。

かくして墓碑銘が達成しているのは、すべての文学の達成目標なのだ。詩作ひとつにしても、読者をしてまさに詩人そのひとが語っているのだと、詩を読めば詩人の生きた声を耳にすることができるのだと確信させなくてはならない——当の詩人が200年前に亡くなっていようとも。これこそは、読むという行為によって死せる作家の声が甦り、文学が不滅の生命を帯びる瞬間である [Johnson 2008: ch. 1]。

この、あまりにもバーバラ・ジョンソンの論理展開に接して、わたしはすでに彼女が文学を語っているのか自身を語っているのか、墓碑銘を語っているのか人工生命を語っているのか、あまりにも混沌として区別がつかない。だが、最晩年の遺作でとうとう生死の境すら脱構築してしまった批評家のテクスト群が、とうにわれわれの血肉を成していること、将来いかにアメリカ文学研究が変容しようとも、まさにその理論的内部において蘇生し続けるで

あろうことだけは、疑いを容れない。

註

- ¹ <<http://www.iasaweb.org/>> (accessed Feb. 28, 2010)
- ² <http://escholarship.org/uc/search?entity=acgcc_jtas;view=masthead> (accessed Feb. 28, 2010)
- ³ *Folsom Funeral Service* <<http://www.folsomfuneral.com/?p=776>> (accessed Feb. 28, 2010)

参考文献

- Bercovitch, Sacvan, ed. *The Cambridge History of American Literature*. 8 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1994-2005.
- Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature across Deep Time*. Princeton: Princeton University Press, 2006.
- Dimock, Wai Chee and Lawrence Buell, eds. *Shades of the Planet: American Literature as World Literature*. Princeton: Princeton University Press, 2007.
- Elliott, Emory, ed. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia University Press, 1988.
- Fehrenbach, Heide and Uta G. Poiger, eds. *Transactions, Transgressions, Transformations: American Culture in Western Europe and Japan*. New York: Berghahn, 2000.
- Fliegelman, Jay. *Declaring Independence: Jefferson, Natural Language, and the Culture of Performance*. Stanford: Stanford University Press, 1993.
- Gruesz, Kirsten Silva. "The Gulf of Mexico System and the 'Latinness' of New Orleans," *American Literary History* 18.3 (Fall 2006): 468-495.
- Huang, Yunte. *Transpacific Imaginations: History, Literature, Counterpoetics*. Cambridge: Harvard University Press, 2008.
- Johnson, Barbara. *Persons and Things*. Cambridge: Harvard University Press, 2008.
- Marcus, Greil and Werner Sollors, eds. *A New Literary History of America*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 2009.
- McHale, Brian. "'A Poet May Not Exist': Mock-Hoaxes and the Construction of National Identity," in *The Faces of Anonymity: Anonymous and Pseudonymous Publication from the Sixteenth to the Twentieth Century*. ed. Robert J. Griffin. New York: Palgrave Macmillan, 2003. 233-52.
- Murphy, Gretchen. *Hemispheric Imaginings: The Monroe Doctrine and Narratives of U.S. Empire*. Durham: Duke University Press, 2005.

- Okiihiro, Gary. *Island World: A History of Hawai'i and the United States*. Berkeley: University of California Press, 2008.
- Pease, Donald. *Visionary Compacts: American Renaissance Writings in Cultural Context*. Madison: University of Wisconsin Press, 1987.
- Pynchon, Thomas. *Inherent Vice*. New York: Penguin, 2009.
- Radway, Janice A., et al., eds. *American Studies: An Anthology*. Chichester: Wiley-Blackwell, 2009.
- Rowe, John Carlos. *The New American Studies*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2002.
- Siemerling, Winfried. *The New North American Studies: Culture, Writing and the Politics of Recognition*. London: Routledge, 2005.
- Spivak, Gayatri. *Death of a Discipline*. New York: Columbia University Press, 2003. [上村忠男・鈴木聡訳『ある学問の死——惑星思考の比較文学へ』みすず書房, 2004年]
- Tatsumi, Takayuki. *Full Metal Apache: Transactions between Cyberpunk Japan and Avant-Pop America*. Durham: Duke University Press, 2006.

